

鏡山旧錦絵

花見の場から奥庭の場

いび糸り子供歌舞伎保存会

揖斐川町

大名家の大奥を預かる局岩藤は、御家騒動の陰の黒幕。彼女にとつて、大姫の信頼厚い中老尾上は目障りな存在です。ある花見の宴の折、岩藤は、剣術の心得のない尾上に無理やり立会いを迫ります。そこへ召使のお初が主の代役を買って出て、岩藤を打ち負かしてしまいます。折から幕府の使者として、劍澤弾正が、弥陀の尊像とお墨付きの入った箱を受け取りに来ます。それは大姫から尾上に託されていたものでしたが、箱を開けると中には草履があるばかり。岩藤の策略により、尊像は盗み出されていたのでした。尾上に濡れ衣を着せ、草履で打ち据える岩藤。屈辱を受けた尾上は、

お初に使いを命じて外出させ、自室で密かに自害します。ちようどその頃、お初は忠臣求女と共に、岩藤が弾正と企てた悪事の全てを知ることとなります。あわてて主の下へ戻るとそこには変わり果てた尾上の姿が……。主の無念を晴らし、岩藤の悪事を暴くべく、奥庭で待ち伏せするお初。果たして、仇討ちは遂げられるでしょうか？ 女忠臣蔵とも呼ばれるこの外題は、市川弁十郎氏が脚色。冒頭部分の立会いで竹刀を桜の枝に代えるなど、全体をコンパクトにまとめる工夫がなされています。

戎詣恋釣針 釣女

鳳凰座歌舞伎保存会

下呂市

大名と太郎冠者が登場。大名はこの年まで定まった妻がないので、西宮の戎神社に参詣して妻を申しうけることにしたと語る。太郎冠者もついでに神徳にすがって妻を得たいと申し出る。主従は早速西宮へ向かうが、道中太郎冠者は名所を織り込んだ小唄を唄い、小舞いを舞う。戎神社に着いた二人は神前で祈り、夜を徹してお籠りをした。大名はその間霊夢を得たと語り、足元に竿が落ちていたのに気づき、「釣ろよ釣ろよ」とはやししながら釣糸を投げる。すると、釣り糸の先に美女が現われる。大名と美女は祝言し、太郎冠者

が祝って舞う。次は太郎冠者の番である。太郎冠者は「釣ろよ釣ろよ、釣る物は何々」という賑やかな曲に合わせて同じように釣糸を投げる。と、被衣を被った女が現われるが……。あとは見てのお楽しみ。



壇浦鏖軍記

重忠館の場

可児歌舞伎同好会

可児市

源平屋島の合戦で平家は滅亡、平家の侍大将、悪七兵衛景清は平家の重宝、青山の琵琶を持って行衛知れず。その景清詮議の指揮を取るのには仁義に厚い秩父庄司重忠と邪心の深い岩永左衛門。景清の愛人阿古屋は京の五条の遊女であった。重忠は郎党半沢六郎に命じ、阿古屋を呼び出し詮議するが白状せず、重忠の詮議は生ぬるいと岩永は責めの手を変え、景清と阿古屋の間に生まれた娘人丸を引き出し、青竹で人丸を拷問にける。見るに見かねた阿古屋は岩永の差添を取るより早く人丸を刺す。お

どろいた岩永は阿古屋に切りつけると阿古屋の立兵庫が割れる。阿古屋までも手にかけてしまったと思えば岩永はうろたえ逃げ去る。重忠のはからいで阿古屋と人丸は親子の対面を果たすが、人丸ははかなく息絶える。嘆き悲しむ阿古屋と重忠、重忠の妻高ノ井。別れを惜しみながら阿古屋は人丸の遺髪を胸に重忠館の後にする。大歌舞伎では阿古屋の琴責めとして楽器を弾かせて詮議するが、地方歌舞伎では人丸責めとして伝えられている。

恋飛脚大和往来

封印切

高雄歌舞伎保存会

郡上市

有名な近松門左衛門の人形浄瑠璃を歌舞伎化した悲恋ドラマで、実際にあった公金横領事件が題材。主人公の忠兵衛は奈良の豪農から大阪飛脚屋に養子に出た身分。なまじ育ちが裕福なので金銭感覚が甘く忍耐力に欠けます。遊女梅川と相愛の仲となりましたが、身請けの話が起き、男の意地から為替の封印を切ってしまいます。飛脚屋が商用の公金に手をつければ死罪です。その大事を明らかにされた梅川は、どこまでも忠兵衛に従ってゆく決心をして二人は死出の旅に出ます。

前半の忠兵衛は、恋に浮かれた男のおかしみを見せ、中盤から公金に手をつけた男の心理をリアルに描いていくその芸が見どころ。

